

ヲ勉勵スルノ法ヲ設ケ、以テ振起スルノ風ニ向ハシム」とし、これまでの思永館の館名も新たに育徳館とした。思永館の終焉である。

## 二 私塾教育

### 塾教育の特色

私塾は、武士階級だけを教育した藩学に対し、階級的差別なく、塾主の学徳を慕う向学の人に門が開かれ、塾主の信念による学風や、独自の教育精神によって樹立されたものが多く、藩政時代の民間教育機関であった。

塾教育の特色として、三つの類型が考えられる。その一は、その国の藩校との関係が強いもの、その二は、逆に藩校と無関係に独自の立場を固守した塾、その三は、藩にことさら対抗するのではなく、全然無関係に、郷土および人間の育成に主眼をおき、名利をはなれての純粹な教育を目的とした塾である。

豊前においては、上毛郡の小野原善言の塾が、その二にあたるのではないかと思われる。小野原善言は、日田から江戸および水戸にまで遊学して会沢正志斎に就き、この地方では珍しく水戸の学風を唱導した人であった。孝悌報恩の教えを布くことを以て天職とし、小倉藩校の教職を退いてからは、郷里八田村小野原山において私塾を開いた。藩に忌避されながらも、その教育熱は強く、屈せず、明治元年（一八六八）、小笠原支藩の郷校が築城郡越路村こしじに建てられてからその督学となり、翌年郷校廃止後、再び塾教育に尽くした。そして、その三の類型として豊前においては、村上仏山の水哉園、恒遠醒窓の藏春園、および各地の日田

咸宜園出身者が経営した塾の中にそのような傾向が認められる。

(二) 水 哉 園

村上仏山は、京都郡上稗田村（現行橋市）の出身で、幼時は津積の定村直栄に学び、長じて筑前秋月の原古処、白圭父子に経史、詩文を学び、さらに吉田平陽、貫名海屋に学んで、その詩才をたたえられた。天保六年（一八三五）教育をめざし故郷稗田村に帰り、塾を開き、生涯を教育に尽くした。

教育方針は、漢学の伝授と共に道德の実践に重点をおき、自ら門弟に範を示した。その儒学的な教風は、

第114表 水哉園豊津町関係入門生（京都郡誌）

入門年	住所	氏名	入門年	住所	氏名
天保七年	仲津郡節丸	進 良吉	明治五年	同 豊津	三井 武彦
同	同	末 広	同	同 国作	浄邦寺 教惠
同	同 豊津	柴田 勝三	同	同 豊津	荒木 征雄
同	同 光富	勢 鳥 定次郎	明治六年	同 彦徳	安藤 彦九郎
天保八年	同 国分	国分寺 淳教	同	同 彦徳	安藤 敬太郎
同	同 国分	国分寺 仁龍	明治七年	同 豊津	久保田 彦馬
同	同 惣社	菊地 周平	同	同	林 国次郎
天保十一年	同 国分	国分寺 義応	同	同	松 室 茂
弘化四年	同 国作	加 来 九一郎	同	同 光富	勢 鳥 為次郎
同	同 国作	浄邦寺 行教	明治八年	同 豊津	青 木 辰三郎
嘉永元年	同 国分	内 田 三之丞	同	同 国分	松 井 義寛
同	同 節丸	進 源 三郎	明治十五年	同 同	植 村 義寛
安政六年	同 国分	国分寺 英梁	同	同 豊津	春 日 寛治
慶応元年	同 国作	加 来 彦藏	明治十六年	同 同	芝 尾 喜多夜又
明治元年	同 節丸	宮 原 勘治	同	同 同	有 賀 淀 彦

仏山が原古処の影響を多く受け、その上、亀井門に寄寓したことなどの影響により、朱子学に説く主知主義的なものよりも、主意的、行為主義的なものが強かったようである。そのため実践的な人格の練磨を説き、心情の自然的な発露としての詩作の意味を鼓吹した。人を愛し、敬することの大切さを学問攻究に生かすように努めた。

門人帳によれば、天保開塾以来明治十七年（二八八四）までの仏山および継嗣静窓への入門者は千三百有余名を数え、九州一円からさらに、中国、四国からの入学者がいたほど盛況であった。門下のうち俊秀として知られているのは、末松謙澄（名線松）、安広伴一郎などがあげられる。村上仏山、静窓父子二代五〇年間において豊津町関係入門生は第14表の通りである。

## （二） 蔵 春 園

恒遠醒窓（頼母）は、上毛郡葉師寺（現豊前市）の医家の出身で、村上仏山の水哉園とともに北豊で名声の高い恒遠塾の初代塾主である。十七歳の時から豊後日田の広瀬淡窓（咸宜園）に学び、天来の学才が一層光をはなった篤学者であった。文政七年（二八二四）一二歳の時、故郷に塾を開き、自遠館と称し、仏山と同じく生涯を教育に尽くした。この自遠館が蔵春園の起源である。

醒窓の学風は、広瀬淡窓の影響を深く受けたが、必ずしもそのままを継いだとはいえず、淡窓が朱子に拠りつつもそれだけになじまず、老荘からさらに仏教をも取り入れ、敬天を重んずる折衷的な立場をとったのに対し、それよりも朱子の比重が大であった。

教育方法としては、易经にいう屈伸感応の理を採用した。同塾の告諭で「易に屈伸の理を説けり、是学者第一可心得事也、故我塾には序席を設け、如何様發達の輩も最初は人の下に居、年月を入精候上者、上達を遂げ一塾の長と相任じ候様致申候」と示し、学ぶ者として当初屈することに耐え得ない者には、伸は求めがたいことを説いた。塾には学級組織を設け、一〇級に分け、さらに各級を上下に分けた。授業の上からは、一〇級を上中下の三組とし、九、八級を下会生、五級以上を上会生とし、十級は客席と称して年長の新入生、学力不明の新入生をもって組織した。下会は素読を中心にし、中会は四書、孝経、諸子の講義、上会は五經の講義を課し、その上、それぞれに特定の史書、文集の独見会（自習）を併課した。そして、これらの学科の平素の成績と試験により、毎月月旦と称して成績順に記したものを塾内に掲示した。これを月旦評というが、これらは日田の咸宜園の方法に倣ったものであり、同塾の特色ともいえるだろう。

門人帳によれば、学徒は九州はもちろん近江あたりからも集まり盛況であった。寮舎も拡張され、入門帳によると文政七年より明治十三年（一八八〇）まで七〇〇人に上る。しかし、実際には入門帳に二〇年分欠失している部分があるので少なくとも一千人以上の門人が入門したのではないだろうか。文久三年（一八六三）醒窓が没してからしばらくは門弟が塾を維持し、元治元年（一八六四）から嗣子精齋（敬吉郎）が二三歳で継承した。精齋は、肥後の蒙齋に師事し、さらに京都西本願寺で学習した。学風は父醒窓、師蒙齋のあとをうけ、朱子学で易理を重んずる学風、教風は前代と変わらなかった。北豊の教育に貢献するところが大であった。

恒遠塾関係として醒窓、精齋父子二代六年間（入門帳二〇年間分欠失不詳）において京都・仲津郡関係の入門生は次のとおりである（第115表）。

第115表 恒遠塾京都・仲津郡関係入門生

入門年月日	住所	氏名	入門年月日	住所	氏名
文政九年 四月一四日	京都郡苅田	井上 國治	嘉永二年 九月一八日	京都郡下崎則住寺	大 円
同	同	林田 岩治郎	元治元年 九月二日	同 苅田駅浄厳寺	法 海
同	同	井上 仁會治	慶応四年 四月二三日	仲津郡光富	進 要人
文政一一年二月一九日	仲津郡竹田歴應寺	積 法州	元治二年 三月二五日	同 大橋旧縁寺	徳 隣
天保三年一〇月二日	京都郡新津真念寺	勇 哲	慶応元年一〇月	同 松原	竹中 伝造
同 一月	京都郡下稗田	水野 幸三郎	明治二年 六月	同 上高屋	西 盛太郎
天保四年 二月一九日	仲津郡節丸	進 龍之助	明治三年一〇月一〇日	同 木井馬場	池田 盛太郎
天保五年 三月二六日	仲津郡木井	藤河 三治	同 一月九日	同 彦徳	池田 盛太郎
同	同	西頭 兵三郎	同 一〇月	同 稲童	井村 富太郎
同	同	永沼 貞庵	明治三年 一月一九日	同 節丸	加来 賢直
弘化三年 五月二二日	同 帆柱	良 中	同	京都郡勸崎	高橋 元彦
同	同 今井善徳寺	徹 浄	同	同 矢山	藤ノ木 桓
弘化四年 四月一〇日	同 柳瀬文台寺	同	同	同	長曾我部 元家

(「豊津町誌」より)

三 庶民の教育 (寺子屋)

学ばせない政策から庶民教育奨励へ

徳川時代の前半代までの庶民教育は、武士階級の政治的・経済的地位保持のため文字を学ばせない政策がとられ、武士を除いた大部分の人は日用生活に必要な知識について経験的に習得するはかばかかった。しかし、その後、太平の時代にもない国内経済の発達により経済生活の必要から庶民教育が必要となり、発達をもたらした。

て経験的に習得するはかばかかった。しかし、その後、太平の時代にもない国内経済の発達により経済生活の必要から庶民教育が必要となり、発達をもたらした。